

414
A 3955



日本ノ線系ヲ精良ニセシカ為メ日本政府
 内部ニ於テ一日ノ場所ヲ見立テ茲ニ歐羅
 巴風ノ線系場ヲ取建ル事ヲ決定セリ
 此線系場ヲ取建ル事ヲフリユナ氏ニ命ス
 即チ約定ノ條々左ノ如シ
 フリユナ氏勤務中ハ左ノ條件ヲ固守シ
 自分委任ヲ受シ職務ヲ充分ニ為シ遂
 ル様勉勵盡カスヘシ

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈



此事業ヲ便利ニシ其信ヲ弘ムルヲ請フ
為メ日本政府エツトリ、エルトル商社ニ頼ミ
之ヲシテ周旋セシムヘシ

第一条

線系所取建蓄械ノ設ケ方線系ノ仕法
及職人ノ進退等ハ別紙見込書通り
タルヘシ

第二条

製糸系ニ付タル働向ヲアリユナ氏ニ任スト雖モ
日本政府ニテ其場所ノ管轄ヲ命スル者
ヨリ諸事其任業ノ検査ヲ受クヘシ
但右管轄人ハ商會ノ者ナリトモ此例ニ
從フヘシ

第三条

線系場建築ハアリユナ氏ト同合セノ上日本
政府之ヲ定ムヘシ

但建物ノ廣及其間取等ハ前同様ナ
リユナ氏ニ問合セ日本政府ニテ之ヲ造営
スヘシ

第四條

別紙見込書ニ委細掲載スル建物造營
ニ必用ナル物材ハ歐羅巴ニ於テ之ヲ買求ム
ヘシ之カ為メフリユナ氏十二月ノ郵船ニテ佛
國ニ赴キ大凡ノ紙ニ載ル價ヲ以テ物材

ヲ注文シ千八百七十一年六月其頃迄ニ
出来セシ分ヲ以テ日本ニ歸港スヘシ其
餘ノ分ハ同年十月迄日本ニ積廻スヘ
シ右ニ記スル時限ハ大凡ノ見積ナリ

但フリユナ氏出帆時日本政府器械代
運送賃海上請負料等ノ大凡積
金高ノ六分通ラエクト、エニタル高社へ
渡スヘシ右器械到着濟ノ上買入代

運送及海上清負ノタメ仕拂シ金高ノ
精取書ヲ日本政府へ差出ス上ハ残り
惣金高ヲ渡シ手数料トシテ金高
ノ五分ヲ右高社ニ與フヘシ

第五條

フリユナ氏佛國へ赴ク時往返トモ郵船
中第一等ヲ以テスヘシ

但其價ハ往返凡千五百弗ナルベシ

第六條

日本政府雇ヘル歐羅巴ノ男女職人ハエシ
トリ、ユニタル高社ニテ雇入方取計ヘシ

第七條

フリユナ氏六月帰航ノ節雇ハレタル丈ケノ
職人ヲ連来ルヘシ

但男女職人給料ハ雇入ノ日ヨリ與フヘキ
等ニテ航海往返トモ郵船中第一等

ヲ與フヘシ此價ハ片路ニテ凡三百八十弗ナ
ルヘシ尤職人等日本政府ノ許可ナクシテ
期限中帰國セントスル者ハ歸航郵
船賃ヲ給セサルヘシ

第ハ条

職人内其職ニ堪クサル者アル時ハ之ヲ替ヘ
或ハ帰國セシムル事總テ日本政府ノ望
ニ從ヒブリユナ氏之ヲ進退スヘシ

但職人ノ給料ハ別紙見込書ノ大凡
高ニ基キ定ムヘシ

第九条

ブリユナ氏約定期限ハ千八百七十一年第
一月ヨリ五ヶ年トス

第十条

ブリユナ氏給俸一ヶ月六百弗ト定メ約定
極ノ日ヨク相渡スヘシ

但フリユナ氏及外諸職人ノ住居總テ
線系場ノ用スルヘシ衣食料ハ通常
ノ賄方ヲ以テ線系場ニテ凡三ヶ月試
ノ上其ノ費ヲ平均シテフリユナ氏并
職人トモ月給ニ増加シ銘ノ手賄ト
セシムヘシ

第十一條

男女職人雇入ノ定メ期限ハ取極ノ日限

算シテニヶ年ヨリ四ヶ年ナルヘシト雖日本
政府ニヶ年ノ後ニ至リ之ヲ断ル事ヲ得ヘ
シ

第十二條

蘭ヲ買入ル線系場出產ノ系ヲ考捌シ
事ハ總テ日本管轄人ノ取扱タルヘシ
但蘭買入ル線系上ニ於テ頗ル緊要
ノ事ナルハ買入者ハフリユナ氏ノ意ニ

長テ之ヲ決定スヘシ

第十四条

蘭及ヒ系ノ量自ラ掛ル事ハ日本ノ管轄
人之ヲ取扱ヒ會計簿ノ兩通ニ立置キ
一日本管轄人之ヲ掌リ一ハフリユナ氏十
リ

第十五条

日本職人之取締ハ日本管轄人之任ニシテ

働向ノ割付ケ方ハフリユナ氏ノ取扱タルヘシ

第十六条

前三条ニ舉ル事務ノ巨細ハ日本管轄人
フリユナ氏ト相談ノ上規則ヲ定ムヘシ

第十七条

線糸場ニテ蘭糸賣買ニ付ル益金毎年ハ
總勘定ヨリノテ建築并若撤元
價ノ利息ニテ年府六分其外日用ノ諸

雜費職人等ノ給金一切引去リ全ク相生スル益高ノ一割ハ右取扱ヲ勉勵スル褒賞トシテフリユナ氏ニ給與スヘシ

第十七條

フリユナ氏及ヒ外職人等ニ關係セズシテ日本政府ノ都合ニヨリ斷リ及フ時ノ弱定年限中ノ給料ヲ給與スヘシ

但フリユナ氏及外職人等モ之ノ不勤ニテ

此給金ニ背キ暇ヲ出ス時ハ其勤メシ

月占ノ給金ノニ與ラフヘシ

職人等不快ノ節服藥料ノ豫定場ノ入用タルヘシ若シ病氣ニテ傷キ方出来セサルモノハ帰國セシムヘシ

但此場合ニテ帰國ノ者ハ其勤メシ月占ノ給金ノニ與ラフヘシ且郵船賃ヲモ與ラフヘシ

第十九条

フリユナ氏繰糸場要由ノ外用ニテ他出ス
ルハ日本政府ノ許可ニ於テ可シ

第二十条

歐羅巴ヨリ雇入タル諸職人等私用他
出ハ日數四日以上ナラハ日割ヲ以テ其月終
減スヘシ尤格別ノ旨ニテフリユナ氏ヨク
申立マレバ日限ニ拘ラサル事アルヘシ

第二十一条

我東國年ノ末則千八百七十三年ノ終リニ至
リ會計ヲ算セシ上製造場損失有也
ニシテ未来利益ノ推量モナキ時ハ日本
政府残り二年ノ条約ヲ廢スルハ勝手
タルヘシ

但其場合ニ於テハフリユナ氏并諸職
人其月止ノ給料ヲ與フ帰航ノ船

價ヲ為スヘシ

右条約二十一条之趣固相守可申和文
三通佛文三通互ニ調印シテ之ヲ為取
替内和文佛文トモ各一通ツ、并別紙見
込書ヲ添へ後證ノ為佛蘭西公使館
預ケ置者也

明治三年庚午閏十月七日

大木民部大輔

吉井民部少輔

花押

林 民部大丞

花押

千八百七十年十一月四日

於東京

右約書并ニ約書ニ添タル見込書共和文佛文トモ
一今意味ノ差別無之ヲ證ス

ジブスヶ

イクトリマコンペニー
カイセナイモル

歐羅巴ノ法方ヲ用ヒ繰繰機ヲ日本ニ取建
ル時左ニ舉ルノ利益ヲ起ス事必定ナリ

損失ヲ防ク

縮絲ノ品位ヲ上等ニスル

可成入費ヲ省キテ此利益ヲ得ニハ強クテ
現今歐羅巴各國ニ於テ用ユル法方ヲ其儘
日本ニ移スト雖必ス益アルニ非ス今實地就
テ論スルニ歐州汽機ノ便ヲ以テ日本在来ノ

法ヲ増補スルニ如クモナシ加フルニ各國ニ於テ經驗上ニ就
及ビニ各要件細微一ニ至ル迄盡ク之ヲ傳授シ日
本職工等旧來慣習ヲ法ヲ改ムルアリ今此法ヲ用ル時
日本產爾ノ性質ニ取リ至極適當ナル操練法ヲ得ルニ
至ラニカ之レ法特ニ日本職人ノ身體長短ニ應ス
ルノミナラス彼等長來習熟ノ法ト甚々異
ナラサルヲ以テ大ニ便利トスルニ由ルアリ
故ニ職人中一層モ旧法ニ熟練

スル者ヲ選擧セハ僅カニ數日ヲ經スシテマ
タル困苦ヲ覺ヘス且無益ニ物材ヲ費ヤサ
スニテ大概自得ノ旧法ニ似寄リシ操練法
方ヲ學ビ得ヘシ然ル時ハ全ク新規ノ法ヲ
教ユルニ及ハ畢竟新法ヲ以テ俄カニ人ヲ
使役スルハ諸般ノ製造家ニ於テ費用ヲ
シラシメテ且最モ難シトスル處ナリ○歐羅巴
女職人數名ヲ來ラシメ日本職人ノ旧

法ニ慣ル者ヲミテ自然新法ニ遷ラシム
爾ニ貯フル絲ヲ盡ク繰出スラ教ユルハ難ニ
非ス然ルラ全ク新規ノ法ヲ以テ俄カニ人ヲ
用ヒント欲スル時ハ各種ノ費用ヲ除ク外別
歐羅巴職人多人數ヲ呼寄サルヲ得ス
此者等每人一年間傳習ヲ遂ルハ繰ニ
ハ人ヨリ十人ニ止マル且特ニ多クノ時日ヲ失
却スルノミナラス航海ノ用其他銘々ノ

給俸モ亦從テ莫大ノ高ニ至ラン加之習學
ノ間絹絲生産ノ高ニ於テモ頗ル損失ヲ起
サン

○第一諸事未タ取掛ラサル以前建白人
國ノ内部ヲ旅行スル必要アリ

第一操車ヲ建ル何レノ地位最モ便
ナル哉ヲ探察セシカタメナリ

第二且地所ヲ選ビタルハ數日ノ間其

地ニ遍る日本を来ノ機械ヲ改革スヘキ
件ニテ研究シ其切ニアル職工ニ勞ムルコト
容易スヘキノ便ヲ便ラシムルコト
第一線車ヲ建ノタメ必要ノ手配ヲ為シ
テ建築ヲ任スヘキ西洋建築者ト商議シ
テ便利ヲ計ル

如斯ク要由ノ手配ヲ為タル上ニテ線車
取立ノ命ヲ受ル者直ニ歐羅巴ニ行各種

ノ機械ヲ命スヘシ此歐行ハ極メテ切要ナリ
其故ハ建築ヲ任スル者自カク之ヲ機械
家製造者ニ達相共ニテ名ヲ檢査スル然ル
後製作ニ任付ル積チナリ以下手書等
ノ注履ノミニテ遂ル能ハス機械ヲ製造ス
ルニ大凡六ヶ月之ヲ組令セ取建ルニ二月
ヲ要ス機械家製造者ヨリ急ニ氣を人
銅ニ職人ノ機械ニ附添フテ

然ル時、横濱ニテ雇入ル職人等ト共ニ
協力シテ之ヲ取建フシ

○茨三孫車ノ用法を、如シ

蘭ヲ買取ル

蘭ヲ蒸殺スル

蘭ヲ日光ニ晒ス

蘭ノ善惡ヲ見分ル

絲ヲ繰出ス

蘭買取方ノ事

蘭ノ總テ新蕪ナルモノヲ製造場ニ持来
ルヘシ即チ繰ヲ吐キ始ムル日ヨリ十日ヲ経テホタ
日光ニ晒サルモノヲ云フ之ヲ屋根アル場ニ處
ニ入置細密ニ點檢シ量目ヲ掛然ル後蒸殺
所ニ送ルアヘシ

蘭ヲ蒸殺スノ事

繰絲法ヲ家モ際要ナル處蒸殺ノ好法ニアリ日

本に於て爾は太陽に晒し其暖氣を以て益殺すと云ふ
是特^{ネコノイ}に^{コノイ}性^ノ愛^シを^テ爾^ヲ害^スル^ノことナラス暖度不
足ナルヲ以て^テカ^キ速^ニ死^セス^ニテ煤^或は^坦ノ^突出^ス
患^少カ^{ラス}今^ノ歐^羅巴^ノ機^械ヲ^用ユ^ルに^於て^ハ如^斯
ノ^不便^ナシ^テ晴^ルを^拍ワ^{ラス}爾^ノ大^ヒナル^高ヲ^益殺
ス^{コト}ヲ^得

爾^ヲ乾^カス^{コト}

前^ニ述^ビル^ニ爾^ヲ益^殺セ^ル上^ニ干^シ場^ニ彈^ニ益^上ニ^要ス^ラ

用^ユル^ニ已^ル前^ニ十分^ニ乾^カス^{コト}

好^シ惡^シ見^分ル^事

暖陽に接し全線掛かる以前先^ニ微^ニぬ^ル機^械等^ヲ
ラ^カツ^テ之^ノ安^ク好^ム孫^ノ製^ノ物^ヲ扱^ク夫^ノキ^ヲ要^セニ^シタ^ル爾^ノ其^ノ他^ノ機^械
に^比シ^テアル^{コト}ヲ^取除^キテ^ハ其^ノ器^ヲ定^ムル^ニテ^ハ以^テ事^ヲ為^スハ
他^ノ機^械直^ニ受^テ又^ニ熱^ク殊^ニ職^ヲシ^テ會^シテ^ハ機^械ヲ^製ス^ル場^所ニ^テ
是^ヲ以^テ第^一ノ^緊務^トス

繰^糸ノ^事

右畢ツテ爾藏ノ處持藏ノ之ヲ受ルニ線線樹之ヲ為ニ機械
 一個釜ヲ設ク内暖湯ノ元ヲ爾者傍線車置ク線線者得釜平
 面ノ臺上傾列ニ下ニ條鑄管アリ内ニ送ルヲ通シテ釜中湯暖線車
 ヲ周旋ニ永車又ニ送ル元力傳ニ運動ニ線線樹取建場空キ
 自由ニ往來ニ目光多キ處ヲ要ス線線樹業極メテ細微ニテ且叮嚀
 取扱フコト要ス燈光之キヲ嫌フ凡ニ百位釜ヲ列スルニ長凡
 七十間巾六間半建物ヲ以テ相當トス

蒸氣機械

右建物ノ中央外面ノ處ニ汽鑪及ヒ汽
 機ヲ設ク五馬カ汽機一個ヲ以テ三百位ノ釜
 ニ添ユル線車ヲ運動スルニ足ル汽鑪三個
 ヲ要ス内ニ二個ハ常ニ使用シ今一ハ不時ノ用
 ニ備フ是ハ前二個ノ内或ハ破損シテ脩復
 スルカ又ハ汗物ヲ拂フ時ニ用ユルタメナリ若勉
 メテ節儉ヲ旨トスル時ハ薪ヲ用ユヘシト虫
 可成ハ石炭ヲ用ユル方便利ナラン前二個ノ汽鑪

日、焚處ノ石炭一噸半ニ過ス

第四三百位ノ釜ニ附属スル繰車ニ三百人毎釜一人職人ヲ要ス絲ヲ繰ルニ當リ繭ヲ煮者二十四人絲ヲ繰リ之ヲ纏フ者二十四人總體ノ職工ヲ扶助シ手傳ヲ為者二十四人は數名ノ少女ヲ用ヒテ可ナラシ傍ヲ繰絲ヲモ習學セシムヘシ其他職人ノ働キヲ検査スルタメ婦人十二人虫蠶ヲ殺ス者四人撤械及ヒ汽罐ヲ取扱フ者四人繭ヲ取扱ヒ

之ヲ布展スル者十人繭ノ好惡ヲ見分ル者六十人
 總計四百六十二人

第五歐羅巴人雇入ノ一

建白者即チ首長タル者ハ二名ノ検査人アリテ輔佐ス各繰絲匠ノ半ヲ管轄ス此者ハ首長不快ノ時彼ニ代リテ事ヲ執ル是事ヲ遂ルノ專務ナリ是カ為歐羅巴ニ於テ二名ノ少年ヲ選ミ其俸充ニ給俸ハ各一ヶ月百弗ヨリ百五十弗

ミテ可ナラシ業ノ可否ヲ見ルタメ歐羅巴ノ婦
人六人ヲ雇ヒ日本ノ女職人ヲ教導セシメ且繰
絲ノ良法ヲ日本職人ニ傳習セシムヘシ此女職人
ノ給俸ハ一ヶ月七十五弗ヨリ百弗ニ至ラン機械
方繰熟ノ機人ハ一ヶ月百二十五弗ヲ與フ蓋シ物
材ノ出用ヲ管轄セシメ日本人ノ火焼ヲ差阻ス
故ニ歐羅巴人ノ數九人或八十人ニシテ其給俸
一ヶ月八百或ハ九百弗ナルヘシ

第六物材ノ大凡價

歐羅巴ニテ建築者ノ算當スル處一人用ノ繰
車要具凡三百ヲラシクモ若之ヲ新ニ改ムル時ハ其
價少シク上ルノ價一個ニ付今三百位ノ釜ヲ買
入ルニ極ク高價ニ見積ルトモ機械一個ノ價七
十弗或ハ六十弗ニ過^ルサルヘシ汽鐘ノ價一個ニ付
一萬五千ヲラシクトシテ四萬五千ヲラシクナリ
蒸氣機械 一萬五千ヲラシク

小道具一切 二萬 フラニク

蒸殺ノ器械及附属品一萬五千 フラニク

總計九萬五千 フラニク

故ニ必要ノ物具ヲ買入ルニ代價九三万七千弗ナリ
此價ハ大凡自算ニテ之ヲ買入ルニ當リテハ或ハ
其高ニ至ラサルトモ之レヲ過ルナカルヘシ前會
計中ニハ物材運送組立及職人航海ノ入
費ヲ加ヘス又機械ヲ不建ノ入用モ此ニ入レス運

送ハ別ニ逐氣船ヲ雇ヒ可成入費ヲ省キテ
積廻リスヘシ

第七職工働キ方

上等ヲ繰車ハ一年中運用スルトモ更ニ意ナシ
職工働キ方ノ定規ハ一週日ノ内六日ト定メ
第七日メハ休息ノ日トス若或ハ之ヲ酷役スル時
ハ粗漏ノ弊ヲ生ス平生毎日ニ出ヨリ始メ日ノ没ニ
終ル燈光ハ如斯精細工ニ不足ナリ此用法ヲ以テ

通例十二「テニエ」ヨリ兩四ツミツ位ニ標出ス十四「テニエ」ノ絲ヲ製スル

繰絲所ニテ一週日毎ニ各釜産スル處ノ絹絲三

「リ」ハ此半ヲ出各釜四十六週日間百六十「リ」

ル又ハ二「リ」半ヲ出スヘシ歐羅巴ニ於テハ此量目

過ル「リ」多シト虫モ大凡平常職工ノ年ニ成ルモ

高ハ是ナリ故ニ日本職工ノ如キハ一年一「リ」ノ絲

ヲ製ヘシ最初ハ新建物内未タ事ニ慣サルヲ以テ

苦妨碍アルハ自然ノ「リ」ニテ此量目ヲ得ルニ至

スト虫モ必ラスニテ年ノ後ハ之ヲ得ルニ至ルヘシ糸一「リ」
コルヲ得ルニ十三或ハ十五「リ」ニ鮮菊ヲ要ス三百
位ノ釜ヲ備フル製造場ニ要スル為ニ一年四千「リ」
ルニヤリ

第八新ニ起スヘキ利益

能着意シテ建立シタル繰車ハ第一損失ヲ薄
ニシテ第二糸ノ品格ヲ上等ニスル「リ」既ニ前文ニ述ヘ
タリ今繰車ヲ立ルニ當リ別ニ故障妨碍ナク相應

ノ繭ヲ得ルノ便五アル時ハ前兩條ノ一其實證
ヲ得ル必セリ第一太陽曝^曝シテ殺スノ法ヲ改メ
「エツツアード」^蒸殺ノ法ヲ用ユル時ハ蝶或ハ蛆突
出スルヲ防キ且長ク太陽晒シ繭ノ上面ヲ覆シ自
然長質ノ糸ヲ生スルノ患^患ヲ除カン今此物枝ヲ
節約ニスルハ時ハ殆トニ割五分ノ益ヲ生セシ其他
日本繰糸ノ法ニテハ屑ノ高五分一割ニ至ルト云フ
然ルニ歐羅巴ノ法ニ因ルトキハ其差大ニ異ナリ

即チニ分ヨリ三分半ノ廢糸純糸トノ差ヲ
算當スルニ一割ノ益ヲ得今ヨリ細詳ニ検査ヲ
加(繭ヲ精選シ其寧地上ノ及扱方細微ノ方法
ヲ教ユルトキハ當今日本産最好ノ糸ヨリ大ヒコ
上等ナルモノヲ産スルニ至ラン故ニ日本中等ノ糸
代價ニ比スレハ一割ノ益ヲ生ス且同種ノ繭ト^品虫
製法ノ巧拙ニヨリ品等ノ上下アルハ々如處ニシ
テ歐羅巴ニ在リテハ好繰車ヲ以テ日本産ノ繭

ヲ製スルニ日本ノ好ナル糸ニ比スレハ其價一割五分
或ハ三割ノ高價ヲ得日本ニ於テモ此損失ヲ
防クテ最モ切要ニシテ追テハ是ト同名ニ至ルヘシ
其故ハ日本産繭ノ性質ニ日本現今ノ形
勢ヲ見ルニ何モ好糸ヲ産スルヲ妨ルモノナシ